

うちなあ 点描
● 第百三回

歴史的建造物の復元・修理事例 (一)

首里城周辺の歴史的景観の再現

文・平良 啓 *Hironu Taira*

首 里城跡一帯で復元・修理された主な歴史的建造物を紹介したい。

昭和三十三年、破壊されたままの園比屋武御嶽石門が復旧修理された。この建造物は琉球国王の拝所であった。石材で木造建築を表現しており、沖縄の石造技術の高さを示す遺構である。昭和三十三年には守礼門が復元された。この門はいわば首里城の顔で、象徴的な建物であったため、当時

注目を集めた。琉球切手の図柄にもなっていたのが記憶に新しい。多くの人々がこの門をくぐって首里城内に向かう。

昭和四十一年に円覚寺放生橋の復旧工事が行われた。創建当初(一四九八年)の古材が残されていたのでそれらを補修し、組み立てて往時の状態に復旧された。牡丹や蓮などの石彫刻は五百年以上経っているがその造形は素晴らしい。

昭和四十三年には円覚寺総門が復元された。戦前に写された写真や、礎石、木材などの古材が一部残っていたことから、これらを分解して往時の姿に再現している。同年、道を隔てた向かいに弁財天堂が復元された。方形屋根の頂部に焼き物の露盤宝珠が載っており、円鑑池の水面と相まって落ち着いた雰囲気が出ています。翌年の昭和四十四年に、弁財天堂が建つ中之島に架

かる天女橋の修理が完了した。琉球石灰岩のアーチの上に細粒砂岩(方言名…ニールビヌフニ)の勾欄が配置されている。

昭和四十九年には、首里城内に入る最初の門である歓会門とその接続石積みが復元された。石造アーチ門の上に木造の櫓が載る形式である。

昭和五十二年には、琉球の第二尚氏王統歴代の陵墓である玉陵が復元修理された。墓室内の本格的な調査が行われ、学術的にも貴重な成果が得られている。

昭和五十八年には久慶門とその接続石積み、石階段が復元された。現在、歓会門と久慶門は国営公園の入り口と出口になっており、毎日多くの人々が期待と満足感で門をくぐっている。

昭和六十一年には、地盤沈下で亀裂が入っていた園比屋武御嶽石門の保存修理が完了した。創建当初の古材を元の位置に設置し、屋根の火焰宝珠や左右の鴟吻などの石彫刻の飾りを往時の形態で復元している。

平成に入ると、首里城跡地とその周辺の復元・整備事業が本格化し、平成四年には首里城公園として一部が開園して現在に至っている。

平成十五年には、玉陵手前の東側に東の御番所が復元された。かつて、この建物は玉陵の管理や儀式などにかかわったとされている。同年に参詣道も整備された。

このように、復元・修理された歴史的建造物と首里城、さらに、池や樹木などが織り成す佇まいは、私たちにとってしばし時間を忘れさせてくれる空間である。いつまでも沖縄の歴史・文化の拠点であってほしいと願う今日このごろである。

龍潭越しに首里城の建物群を望む

